

平成 24 年度

千葉大学先進科学プログラム入学者選考課題

課題 II-E 解答例

II- E 解説・解答のポイント・解答例

問1 (出題意図・解答のポイント)

受験者の日常に近い場面において観察される言説について、自分の既存の意見にとらわれず、同意できるポイントと同意できないポイントの両方を読み取らせる課題。単なる日常の個別具体的な話にとどまらず、権力やその支配の話について考察を展開できればなおよい。

解答では、その意見内容に関わらず、どのように論理展開しているか評価する。たとえば、「草食系」などの流行語に反対するならば何故反対なのか、受容するならば何故受容できるのか、説得的に書かれているかどうかで評価する。

問2 (解答例)

他者イメージとは、現状とは乖離した固定イメージや決まり文句、形象、景勝や観念の総体のことを指している。西洋人にとってオリエントというものを把握可能にするために、単なる想像にとどまらず、特定のパターンに当てはめられ、陳腐化された表象を意味している。

問3 (解答例)

(1) 西洋人の経験の中には、オリエントは歴史的にも文化的にも様々な形で内在している。たとえば、古い植民地のあった土地であり、ヨーロッパの文明と言語の淵源である。にもかかわらず、西洋は、オリエントをパターン化したイメージでとらえ、さらに、そのイメージは、常に「西洋」と「東洋」といった厳格な二項対立に位置づけられ語られ区別されている。この二項対立の論理により、西洋は、東洋を「衰退」あるいは「消滅」、「過去」、「後進性」、「エキゾチック」といった本質的な差異をもつものとして再構成し、その差異に照準化し、断続的に語ることでオリエント表象を権威化する。つまり、オリエンタリズムとは、オリエント（他者）ではない西洋（自己）としてみずからのアイデンティティを獲得し、さらにみずからの植民地政策や支配の構図の中でオリエントを扱うための西洋の思想様式のことである。

(2) (1) で示した二項対立の構図には、東洋への西洋の直接の関わり（＝接触、交流）や支配の歴史は存在しない、つまりオリエントは自己から切り離れた存在として認識されている。その結果、西洋人は、オリエントの生々しい現実を捨象され、戦闘のさなか、あるいはそれ以前の時代を生きたベイルート（オリエント）の人々の存在、さらには、今そうした戦いが継続する状況におかれた人々の生きざまに関心を持つことはない。オリエントは、ロマンスとして、エキゾチックなものとして、あるいは消滅していくものや過去のもの、そして、嘆き悲しまれる存在として理解される。さらには、戦闘が続くという状況、つまり自己統治ができない存在として認識されることにより、西洋の優位性や植民地を正当化させてしまうという問題である。

問5 (解答例)

大人たちは、若年者を「いまどきの若者」として、必ずしも実態を伴わない他者イメージとして評価を下す傾向がある。それは、「草食系」であったり、「異星人」であったりし、究極的には「若者」とい

われている人を否定的に、あるいは嘆かれる存在として捉えている。こうした認識の仕方は、オリエンタリズムの思考に近似している。そのような語りは、文章 A の著者が指摘しているように、あたかも自分たちが若い時はそうではなかったかのような自己を示唆するからだ。そうすることで、自己の社会人としての正当性や職場での上位性や権力を担保する。つまり、文章 A でいう「大人」は文章 B の「西洋人」であり、「いまどきの若者」は「オリエントの人々」となり、この二つの文章は相似形の関係になっていると理解できよう。

(解答のポイント) 以上の二つの文章の相似性を理解しているかを第一に評価する。さらに思考を展開するとすれば、翻って、若者である受験者自身が「西洋人」になることはないのか。例えば、高校生が中学生について「いまどきの中学生は」と語ることはないのかと発想できれば、実は「大人」と「若者」、「西洋」と「東洋」という二項対立の思考は、「大人」あるいは「西洋」という問題にとどまらず、受験者自身もこうしたオリエンタリズムの構造に取り込まれていることも理解できよう。